

第 34 回日本核医学技術学会総会学術大会 印象記

櫻井 実
Sakurai Minoru

第 54 回日本核医学会学術総会（会長 畑澤順先生）、及び第 34 回日本核医学技術学会総会学術大会（大会長 藤埜浩一先生）の合同総会は、2014 年 11 月 6 日（木）～8 日（土）の 3 日間、大阪の地で開催された。会場は、大阪市北区中之島にある大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で、建物は堂島川と土佐堀川に挟まれており、期間中は天候にも恵まれていたため高層階からの眺望は素晴らしかった。京阪電鉄の中之島駅出口を出るとすぐに会場という利便性も売りの 1 つとなっていたが、川沿いの遊歩道は非常に眺めも良くて風も爽やかで、わざわざ 1 つ 2 つ手前の駅で下車して散歩がてら会場に来られる学会参加者の方々もちらほら見られた。

期間中には様々なイベントが企画されており、身体が 1 つしかないことが残念なほど興味深いセッションがたくさんあった。筆者自身の興味を優先してシンポジウムや教育講演などを中心に参加したため、内容に偏りがあることはご了承いただきたい。本稿では、参加したセッションを中心に紹介する。

初日には、同時にアジア地域核医学協議会年次学術総会（ARCCNM：Asian Regional Cooperative Council for Nuclear Medicine）とアジア核医学技術学会（ASNMT：Asian Society of Nuclear Medicine Technology）の国際学会も開催されており、例年以上に国際色が強い雰囲気であった。ASNMT のセッションに参加したが、12 階の離れた会場で開催されていたためか、若干日本人の参加者が少なかったように見受けられ

た。過去 3 回は日本・韓国・台湾の 3 国間で行われていたのだが、今回はシンガポールやベトナムからも参加者があり、アジア地区最大の核医学技術系国際学会としての地位を得たように思う。ドーパミン・トランスポーター・イメージングの発表が多かったような印象を受けたが、本邦でも同様の傾向を示しているだけに、核医学業界では相当新薬剤を熱望していたのだと強く感じた。核医学会では、中国と日中核医学交流会などのセッションも設けられ、個別に強固な関係を築き始めていると推察される。

初日の会長講演・大会長講演では、核医学会の会長である畑澤先生が「核医学の未来を見つめる：大阪から世界へのメッセージ」というテーマで、人材教育の大切さについて熱く語られていた。日本から世界へ発信する研究を進める手段として環境等を整え、更に優れた人材を育成するためには、“大阪の地であること”が重要なポイントであると述べられていた。“大阪には新しいものに着手し、積み重ね、成し遂げるための気質が古くから脈々と受け継がれている”というような内容だったと理解している。また、核医学技術学会の大会長である藤埜先生は、「核医学技術の未来に向けて」というテーマで標準化の重要性と推進のための構想について述べられていた。多種多様な装置が混在し様々な技術や解析法が日々開発されている現状を踏まえると、標準化の困難さは自明の理である。しかしながら、それを承知の上でやらなければならない仕事であると覚悟を決められてい

るようだ。出発点を分散して同時に多方面から攻めながら、また随時修正を行いながら頂を目指すというような構想であった。進行に関しても、時代の趨勢を見つめながら有機的に組織を変更し、短いスパンで積み上げて5年後につながるというような計画を目の当たりにし、筆者自身の仕事や研究スタイルなどにも非常に参考になるのではないかと感銘を受けた。畑澤先生の愛情のこもった情熱、藤埜先生のクールさなど、学ぶべきことの多い1時間であった。

大会長指名講演の「夢はふたたび宇宙へ」は、東大阪のいわゆる“おっちゃん”たちが、中小企業の技術を集結して作成した人工衛星“まいど1号”の打ち上げに関する様々な困難を克服する話であった。前述の畑澤先生の講演でもふれていた大阪人の気質が伺える内容であり、努力を惜しまないことと諦めないことが大切だと教えられた。

一般研究のセッションでは、心臓核医学の発表を聴講した。最近話題の多焦点ファンビームコリメータや半導体 SPECT 装置に関する会場は満員で、十分に発表の内容を聴講できたわけではないが、非常に心筋の描出能が向上している（分解能や感度の面で）ことに感心した。その一方で、従来認識されなかったような異常画像が認識され始めていることに興味を覚えた。これらが診断をする上でどのような障害になり、抑制する方向に技術が進むのか、あるいはアーチファクトとして容認した上で読影をするようになるのか、今後の研究発表が見逃せない。核医学会のワーキンググループ報告でも同様の内容の発表があり、従来の SPECT 像のノーマルデータベースとは異なる傾向を示し、読影時に注意が必要であると述べられていた。

核医学のシンポジウムでは、「日本初、次世代認知症イメージング」として、日本で開発された認知症イメージング製剤について講演がなされていた。東北大学や放射線医学総合研究所では古くから認知症の画像化技術の研究が盛んだったが、特に最近のタウイメージングにおい

ては国内での競争が激化しているようだ。認知症の治療を考える上では、治療の効果判定も含め分子イメージングが必須であり、高感度でより定量的な値を出せるかどうかが研究の焦点になってくるのではないだろうか。興味深かったのは SPECT 用のプローブの開発で、国内に現存する SPECT 装置でアミロイドやタウの検査が可能となれば、早期治療が可能となり医療費削減にも大きく貢献することができるのだろうが、超えるべきハードルは少なくないようだ。

大阪国際会議場は、広大なスペースを利用して各メーカーの機器展示なども行われ、日本ラジオロジー協会主催の春の学会を思い起こさせるほどであった。ポスター会場の近くには、一部ではあるが見逃した発表のプレゼンテーションを拝見できるコーナーがあり、勉強熱心な参加者への配慮が行き届いていた。しかしながら広い会場は不便なこともある。拝聴したいセッションの会場が離れている場合にはエレベーターやエスカレーターなどでの移動が必要となり、後ろの方で立ち見となることが多々あった。今回は東京での開催となるが、盛りだくさんのセッションが組み込まれた大阪大会の後では企画が大変そうだ。

今回は、新しい SPECT 製剤での検討が多かったが、今後の新規薬剤への期待も高まっている。一方、半導体 SPECT 装置の国内設置も徐々に増加しているようで、PET に関しても PSF (Point Spread Function) や TOF (Time of Flight) といった新しい技術の検討も堅調なものとなっている。PET/MRI 装置の国内設置も徐々に増加するようで、今後多数の検討発表が出されるものと期待している。PET 装置に関しては、ランチョンセミナーなどで提示されていたデジタル技術導入で、新しい時代に突入する期待感があるが、国内設置はまだまだ先になりそうだ。最後に、成功裏に本大会が終了され、ご尽力された畑澤会長、藤埜大会長、実行委員会並びに協賛各社の皆様に深く感謝いたします。

(日本医科大学健診医療センター)